

芭蕉雜記

芥川龍之介

青空文庫

一 著書

芭蕉は一卷の書も著はしたことはない。所謂芭蕉の七部集しちぶしふなるものも悉門人の著はしたものである。これは芭蕉自身の言葉によれば、名聞みやうもんを好まぬ為だつたらしい。

「曲きよく翠問すゐとふ、発句ほつくを取りあつめ、集作ると云へる、此道の執心しふしんなるべきや。翁日をぬはく、これ卑しき心より我上手わがじやうずなるを知られんと我を忘れたる名聞いづより出る事也。」

かう云つたのも一応は尤もである。しかしその次を読んで見れば、おのづから微笑を禁じ得ない。

「集とは其風体ふうたいの句々をえらび、我風体と云ふことを知らするまで也。我俳諧撰集の心なし。しかしながら貞徳ていとく以来其人々の風体ありて、宗因そういんまで俳諧を唱来となへれり。然しかども我わが云所いふころの俳諧は其俳諧にはことなりと云ふことにて、荷兮野水等かけいやすゐに後見うしろみして『冬の日』

『春の日』『あら野』等あり。」

芭蕉の説に従へば、蕉風の集を著はすのは名聞を求めぬことであり、芭蕉の集を著はすのは名聞を求めることである。然らば如何なる流派にも属せぬ一人立ちの詩人はどうする

のであらう？ 且又この説に従へば、たとへば斎藤茂吉氏の「アララギ」へ歌を発表するのは名聞を求めぬことであり、「赤光」や「あら玉」を著はすのは「これ卑しき心より我上手なるを知られんと……」である！

しかし又芭蕉はかう云つてゐる。――「我俳諧撰集の心なし。」芭蕉の説に従へば、七部集の監修をしたのは名聞を離れた仕業である。しかもそれを好まなかつたと云ふのは何か名聞嫌ひの外にも理由のあつたことと思はなければならぬ。然らばこの「何か」は何だつたであらうか？

芭蕉は大事の俳諧さへ「生涯の道の草」と云つたさうである。すると七部集の監修をするのも「空^{くう}」と考へはしなかつたであらうか？ 同時に又集を著はすのさへ、実は「悪」と考へる前に「空」と考へはしなかつたであらうか？ 寒^{かん}山^{さん}は木の葉に詩を題した。が、その木の葉を集めることには余り熱心でもなかつたやうである。芭蕉もやはり木の葉のやうに、一千余句の俳諧は流^る転^{てん}に任せたのではなかつたであらうか？ 少くとも芭蕉の心の奥にはいつもさう云ふ心もちの潜んでゐたのではなかつたであらうか？

僕は芭蕉に著書のなかつたのも当然のことと思つてゐる。その上宗匠の生涯には印税の必要もなかつたではないか？

二 装幀

芭蕉は俳書を上梓^{じやうし}する上にも、いろいろ註文を持つてゐたらしい。たとへば本文の書きざまにはかう云ふ言葉を洩^はらしてゐる。

「書^{かき}やうはいろいろあるべし。唯さわがしからぬ心づかひ有^ありたし。『猿蓑^{さるみの}』能筆なり。されども今少し大^{おほい}なり。作者の名大^{だい}にていやしく見え侍^{はべ}る。」

又勝峯^{かつみね} 晉風^{しんふう}氏の教へによれば、俳書の装幀^{さうてい}も芭蕉以前は華美を好んだのにも関わらず、芭蕉以後は簡素の中に寂^さびを尊^{うや}んだと云ふことである。芭蕉も今日に生れたとすれば、やはり本文は九ポイントにするとか、表紙の布^{きれ}は木綿にするとか、考案を凝^こらしたことであらう。或は又ウィリアム・モリスのやうに、ペエトロン杉風^{さんふう}とも相談の上に、Typogr^{apy}に新意を出したかも知れぬ。

三 自釈

芭蕉は北枝ほくしとの問答の中に、「我句を人に説くは我頬がまちを人に云いふがごとし」と作品の自釈しりぞを却かえけてゐる。しかしこれは当にならぬ。さう云ふ芭蕉も他の門人にはのべつに自釈を試みてゐる。時には大いに苦心したなどと手前味てまへみ噌みそさへあげぬことはない。

「塩鯛の齒ぐきも寒し魚の店たな。此句、翁曰、心づかひせずと句になるものを、自讃に足らずとなり。又かまくらを生いきて出でけん初松魚はつがつをと云ふこそ心の骨折ほねをり人の知らぬ所なり。又日猿の齒白し峰の月といふは其角きかくなり。塩鯛の齒ぐきは我老吟しよなり。下を魚の店と唯いひたるもおのづから句なりと宣のたまへり。」

まことに「我句を人に説くは我頬がまちを人に云がごとし」である。しかし芸術は頬がまちほど、何なんびとにもはつきりわかるものではない。いつも自作に自釈を加へるバアナアド・シヨウの心もちは芭蕉も亦多少は同感だつたであらう。

四 詩人

「俳諧なども生涯の道の草にしてめんどうなものなり」とは芭蕉あねんの惓然に語つた言葉である。その他俳諧を軽んじた口吻こうふんは時々門人に洩くらしたらしい。これは人生を大夢と信じ

た世捨人の芭蕉には寧ろ^{むし}当然の言葉である。

しかしその「生涯の道の草」に芭蕉ほど真剣になつた人は滅多^{めつた}にゐないのに違ひない。いや、芭蕉の氣の入れかたを見れば、「生涯の道の草」などと称したのはポオズではないかと思ふ位である。

「土芳云、翁^{いはく}曰、学ぶ事は常にあり。席に臨んで文台と我と間に髪^{かん}を入れず。思ふこと速^{すみやか}に云出^{いひで}て、爰^{こゝ}に至てまよふ念なし。文台引おろせば即反^{ほご}故なりときびしく示さる詞^{ことば}もあり。或時は大木倒すごとし。鰐^{つばもと}本にきりこむ心得、西瓜きるごとし。梨子^{なし}くふ口つき、三十六句みなやり句などといういろにせめられ侍^{はべ}るも、みな巧者の私意を思ひ破らせんの詞^{ことば}なり。」

この芭蕉の言葉の氣ぐみは殆ど剣術でも教へるやうである。到底俳諧を遊戲にした世捨人などの言葉ではない。更に又芭蕉その人の句作に臨んだ態度を見れば、愈情熱に燃え立つてゐる。

「許^{きよろく}六云、一とせ江戸にて何がしが歳旦びらきとて翁を招きたることあり。予が宅に四五日逗留の後にて侍る。其日雪降て暮にまゐられたり。其俳諧に、

人声の沖にて何を呼^{よぶ}やらん 桃鄰

鼠は舟をきしる暁　　翁

予其後芭蕉庵へ参まゐりとぶらひける時、此句をかたり出し給ふに、予が云、さてさて此暁の一字ありがたき事、あだに聞かんは無念の次第也。動かざること、大山のごとしと申せば師起き上りて曰、此暁の一字聞きとどけ侍りて、愚老が満足かぎりなし。此句はじめは

須磨の鼠の舟きしるおと

と案じける時、前句に声の字有ありて、音の字ならず、依て作りかへたり、須磨の鼠とまでは氣を廻めぐし侍れども、一句連続せざると宣のたまへり。予が云、是須磨の鼠よりはるかにまされり。（中略）暁の一字つよきこと、たとへ侍るものなしと申せば、師もうれしく思はれけん、これほどに聞きてくれる人なし、唯予が口よりいひ出せば、肝をつぶしたる顔のみにて、善惡の差別もなく、鰯の泥に酔たるごとし、其夜此句したる時、一座のものどもに我遅参の罪ありと云へども、此句にて腹を医せよと自慢せしと宣ひ侍る。」

知己に対する感激、流俗に対する輕蔑、芸術に対する情熱、——詩人たる芭蕉の面目はありありとこの逸話に露あらはれてゐる。殊に「この句にて腹を医いせよ」と大氣焰を挙げた勢ひには、——世捨人は少時間しばらくはぬ。敬けい虔けんなる今日の批評家さへ辟易へきえきしなければ幸福である。

「翁凡兆ぼんてうに告て曰、一世のうち秀逸さんご三五あらん人は作者、十句に及ぶ人は名人なり。」

名人さへ一生を消磨した後、十句しか得られぬと云ふことになると、俳諧も亦閑事業ではない。しかも芭蕉の説によれば、つまりは「生涯の道の草」である！

「十一日。朝またまた時雨しぐれす。思ひがけなく東武とうぶの其角きかく来る。（中略）すぐに病床にまゐりて、皮骨連ひこつれんりつ立したまひたる体を見まゐらせて、且愁ひ、且悦ぶ。師も見やりたまひたるまでにて、ただただ涙ぐみたまふ。（中略）

鬪くじとりて菜飯なめしたたかす夜伽よとぎかな 木節

皆子みなこなり蓑みの虫寒く鳴きつくす 乙州

うづくまる葉はのものと寒さかな 丈艸

吹井ふきゐより鶴つるをまねかん初時雨しぐれ 其角

一々ひねん惟然吟声みねんしければ、師丈艸ぢやうさうが句を今一度と望みたまひて、丈艸でかされたり、

いつ聞いてもさびしをり整ひたり、面白し面白しと、しは噺がれし声もて讃めたまひにけり。
「

これは芭蕉しじやくの示寂前しじやく一日に起つた出来事である。芭蕉の俳諧に執する心は死よりもなほ強かつたらしい。もしあらゆる執着に罪障を見出した謡曲の作者にこの一段を語つたと

すれば、芭蕉は必ず行脚あんぎやの僧に地獄の苦艱を訴へる後ジテのちの役を与へられたであらう。かう云ふ情熱を世捨人に見るのは矛盾と云へば矛盾である。しかしこれは矛盾にもせよ、たまたま芭蕉の天才を物語るものではないであらうか？ ゲエテは詩作をしてゐる時には Daemon に憑つかれてゐると云つた。芭蕉も亦世捨人になるには余りに詩魔の翻弄ほんろうを蒙かうつてゐたのではないであらうか？ つまり芭蕉の中の詩人は芭蕉の中の世捨人よりも力強かつたのではないであらうか？

僕は世捨人になり了おほせなかつた芭蕉の矛盾を愛してゐる。同時に又その矛盾の大きかつたことも愛してゐる。さもなければ深草ふかくさの元政げんせいなどにも同じやうに敬意を表したかも知れぬ。

五 未来

「翁遷化せんげの年深川を出給いでふ時、野坡やはとう問て云、俳諧やはり今のごとく作し侍らんや。翁曰、しばらく今の風なるべし、五七年も過ごなば一変あらんとなり。」

「翁曰、俳諧世に三合は出いでたり。七合は残のこたりと申されけり。」

かう云ふ芭蕉の逸話を見ると、如何にも芭蕉は未来の俳諧を歴々と見透してゐたやうである。又大勢の門人の中には義理にも一変したいと工夫したり、残りの七合を拵こしらへるものは自分の外にないと己惚うぬぼれたり、いろいろの喜劇も起つたかも知れぬ。しかしこれは「芭蕉自身の明日」を指した言葉であらう。と云ふのはつまり五六年も経ふれば、芭蕉自身の俳諧は一変化すると云ふ意味であらう。或は又既に公おほやけにしたのは僅々三合の俳諧に過ぎぬ、残りの七合の俳諧は芭蕉自身の胸中に横はつてゐると云ふ意味であらう。すると芭蕉以外の人には五六年は勿論、三百年たつても、一変化することは出来ぬかも知れぬ。七合の俳諧も同じことである。芭蕉は妄みだりに街頭の売ばいばくト先生を真似る人ではない。けれども絶えず芭蕉自身の進歩を感じてゐたことは確かである。——僕はかう信じて疑つたことはない。

六 俗語

芭蕉はその俳諧しばしばの中に屢俗語を用ひてゐる。たとへば下しもの句に徴ちようするが好い。

洗馬せばにて

梅雨つゆばれの私わたくしあめ 雨や雲ちぎれ

「梅雨ばれ」と云ひ、「私雨」と云ひ、「雲ちぎれ」と云ひ、悉俗語ならぬはない。しかも一句の客情かくじやうは無限の寂しみに溢あふれてゐる。（成程かう書いて見ると、不世出の天才を褒め揚げるほど手数のかからぬ仕事はない。殊に何びとも異論を唱へぬ古典的天才を褒め揚げるのは！）かう云ふ例は芭蕉の句中、枚挙まいきよに堪へぬと云つても好い。芭蕉のみづから「俳諧の益は俗語を正すなり」と傲語がうごしたのも当然のことと云はなければならぬ。

「正す」とは文法の教師のやうに語格や仮名遣ひを正すのではない。靈活れいくわつに語感を捉へた上、俗語に魂を与へることである。

「じだらくに居れば涼しき夕ゆふべかな。宗次そうじ。猿みの撰の時、宗次今一句の入集を願ひて数句吟じ侍れど取とべき句なし。一夕いつせき、翁かたはらの側に侍りけるに、いざくつろぎ給へ、我も臥ふしなると宣のたまふ。御ゆるし候へ、じだらくに居れば涼しく侍ると申しければ、翁曰、これこそ発句なれとて、今の句に作つくて入集せさせ給ひけり。」（小宮豊隆氏はこの逸話に興味のある解釈を加へてゐる。同氏の芭蕉研究を参照するが好い。）

この時使はれた「じだらくに」はもう単純なる俗語ではない。紅毛人の言葉を借りれば、芭蕉の情調のトレモロを如実に表現した詩語である。これを更に云ひ直せば、芭蕉の俗語を用ひたのは俗語たるが故に用ひたのではない。詩語たり得るが故に用ひたのである。す

ると芭蕉は詩語たり得る限り、漢語たると雅語たるとを問はず、如何なる言葉をも用ひたことは弁ずるを待たぬのに違ひない。實際又芭蕉は俗語のみならず、漢語をも雅語をも正したのである。

佐夜さよの中山なかやまにて

命なりわづかの笠の下涼み

杜牧とほくが早行さうかうの残夢、小夜の

中山にいたりて忽ち驚く

馬に寝て残夢月遠し茶のけぶり

芭蕉の語彙ごゑはこの通り古今東西に出入してゐる。が、俗語を正したことは最も人目に止まり易い特色だつたのに違ひない。又俗語を正したことに詩人たる芭蕉の大力量も窺うかがはれることは事實である。成程談林だんりんの諸俳人は、——いや、伊丹いたみの鬼貫おにつらさへ芭蕉よりも一足先に俗語を使つてゐたかも知れぬ。けれども所謂平談俗話に鍊金術ほどこを施したのは正に芭蕉の大手柄である。

しかしこの著しい特色は同時に又俳諧に対する誤解を生むことにもなつたらしい。その一つは俳諧を解し易いとした誤解であり、その二つは俳諧を作り易いとした誤解である。

俳諧の月並みに墮^だしたのは、——そんなことは今更弁ぜずとも好い。月並みの喜劇は「芭蕉雜談」の中に子規居士^{こじ}も既に指摘してゐる。唯芭蕉の使つた俗語の精彩を帯びてゐたことだけは今日もなほ力説せねばならぬ。さもなければ所謂民衆詩人は不幸なるウォルト・ホイットマンと共に、芭蕉をも彼等の先達の一人に数へ上げることが憚^{はば}らぬであらう。

七 耳

芭蕉の俳諧を愛する人の耳の穴をあけぬのは残念である。もし「調べ」の美しさに全然無頓着だつたとすれば、芭蕉の俳諧の美しさも殆ど半ばしかのみこめぬであらう。

俳諧は元来歌よりも「調べ」に乏しいものでもある。僅々十七字の活殺の中に「言葉の音楽」をも伝へることは大量の人を待たなければならぬ。のみならず「調べ」にのみ執^{しゅ}するものは俳諧の本道を失したものである。芭蕉の「調べ」を後にせよと云つたのはこの間の消息を語るものであらう。しかし芭蕉自身の俳諧は滅多に「調べ」を忘れたことはない。いや、時には一句の妙を「調べ」にのみ託したものさへある。

夏の月御油^{ごゆ}より出でて赤坂^{あかさか}や

これは夏の月を写すために、「御油」「赤坂」等の地名の与へる色彩の感じを用ひたものである。この手段は少しも珍らしいとは云はれぬ。寧ろ多少陳套ちんたうの譏そしりを招きかねぬ技巧であらう。しかし耳に与へる効果は如何にも旅人の心らしい、悠々とした美しさに溢れてゐる。

年の市線香買ひに出でばやな

仮に「夏の月」の句をリブレットオよりもスコアアのすぐれてゐる句とするならば、この句の如きは両者ともに傑出したものの一例である。年の市いちに線香を買ひに出るのは物寂びたとは云ふものの、懐しい氣もちにも違ひない。その上「出でばやな」とはすみかけた調子は、宛然芭蕉その人の心の小躍りこをどを見るやうである。更に又下の句などを見れば、芭蕉の「調べ」を駆使するのに大自在を極めてゐたことには呆氣あつけにとられてしまふ外はない。

秋ふかき隣は何をする人ぞ

かう云ふ莊重の「調べ」を捉とらへ得たものは茫々たる三百年間にたつた芭蕉一人である。芭蕉は子弟を訓をしへるのに「俳諧は万葉集の心なり」と云つた。この言葉は少しも大風呂敷ではない。芭蕉の俳諧を愛する人の耳の穴をあけねばならぬ所以ゆゑんである。

八 同上

芭蕉の俳諧の特色の一つは目に訴へる美しさと耳に訴へる美しさとの微妙に融け合つた美しさである。西洋人の言葉借りれば、言葉の Formal element と Musical element との融合の上に独特の妙のあることである。これだけは蕪村ぶそんの大手腕も畢つひに追隨出来なかつたらしい。下に挙げるのは几董きとうの編した蕪村句集に載つてゐる春雨の句の全部である。

春雨やものかたりゆく蓑みのと笠

春雨や暮れなんとしてけふもあり

柴漬ふしづけや沈みもやらで春の雨

春雨やいざよふ月の海半ば

春雨や綱が袂こちやうちんに小提灯

西の京にばけもの栖すみて久しく

あれ果たる家有りけり。

今は其沙汰なくて、

春雨や人住みて煙壁けぶりを洩る

物種ものだねの袋濡らしつ春の雨

春雨や身にふる頭巾づきん着たりけり

春雨や小磯の小貝濡るるほど

滝口たきぐちに灯を呼ぶ声や春の雨

ぬなは生おふ池の水みかさや春の雨

夢中吟

春雨やもの書かぬ身のあはれなる

この蕪村の十二句は目に訴へる美しさを、——殊に大和絵らしい美しさを如何にもものびのびと表はしてゐる。しかし耳に訴へて見ると、どうもさほどのびのびとしない。おまけに十二句を続けさまに読めば、同じ「調べ」を繰り返した単調さを感じる憾うらみさへある。が、芭蕉はかう云ふ難所に少しも渋滞じふたいを感じてゐない。

春雨や蓬よもぎをのばす草の道

赤坂にて

無性ぶしやうさやかき起されし春の雨

僕はこの芭蕉の二句の中に百年の春雨を感じてゐる。「蓬をのばす草の道」の氣品の高

いのは云ふを待たぬ。「無性さや」に起り、「かき起されし」とたゆたつた「調べ」にも柔媚じゅうびに近いものう懶さを表はしてゐる。所詮蕪村の十二句もこの芭蕉の二句の前には如何いかんとも出来ぬと評する外はない。兎に角芭蕉の芸術的感覚は近代人などと称するものよりも、数等の洗練を受けてゐたのである。

九 画

東洋の詩歌は和漢を問はず、屢しばしば画趣を命にしてゐる。エポスに詩を発した西洋人はこの「有声の画」の上にも邪道の貼り札をするかも知れぬ。しかし「遙知ハルカニシル郡齋グンサイ夜ノヨ凍トウセ雪ツシヨウ封松ウチクラフウズ竹トキニサンソウノキタルアリ時トウラカケテドクジシユクス有山トウラカケテドクジシユクス僧来トウラカケテドクジシユクス懸燈トウラカケテドクジシユクス独トウラカケテドクジシユクス自宿トウラカケテドクジシユクス」は宛然たる一幀いつたうの南画である。又「蔵並ぶ裏は燕のかよひ道」もおのづから浮世絵の一枚らしい。この画趣を表はすのに自在の手腕を持つてゐたのもやはり芭蕉の俳諧に見のがされぬ特色の一つである。

涼しさやすぐに野松の枝のなり

夕顔あぐらや酔まどて顔出まどす窓の穴

山賤やまがつのおとがひ閉むぐらづる葎むぐらかな

第一は純然たる風景画である。第二は点景人物を加へた風景画である。第三は純然たる人物画である。この芭蕉の三様の画趣はいづれも氣品の低いものではない。殊に「山賤の」は「おとがひ閉づる」に氣味の悪い大きさを表はしてゐる。かう云ふ画趣を表現することは蕪村さへ数歩を遜^{ゆづ}らなければならぬ。(度^{たひ}たび引合ひに出されるのは蕪村の為に氣の毒である。が、これも芭蕉以後の巨匠だつた因果と思はなければならぬ。)のみならず最も蕪村らしい大和画の趣を表はす時にも、芭蕉はやはり樂々と蕪村に負けぬ効果を収めてゐる。

ちまき
粽^{ちまき}ゆふ片手にはさむひたひ髪

芭蕉自身はこの句のことを「物語の体^{たい}」と称したさうである。

十 衆道

芭蕉もシエクスピアやミケル・アンジェロのやうに衆道^{しゆだう}を好んだと云はれてゐる。この談^{はなし}は必しも架空ではない。元禄は井原西鶴の大鑑^{おほかがみ}を生んだ時代である。芭蕉も亦或は時代と共に分桃^{ぶんたう}の契^{ちぎ}りを愛したかも知れない。現に又「我も昔は衆道好きのひが耳

にや」とは若い芭蕉の筆を執つた「貝おほひ」の中の言葉である。その他芭蕉の作品の中には「前髪もまだ若草の匂かな」以下、美少年を歌つたものもない訳ではない。

しかし芭蕉の性慾を倒錯たうさくしてゐたと考へるのは依然として僕には不可能である。成程芭蕉は明らかに「我も昔は衆道好き」と云つた。が、第一にこの言葉は巧みに諧謔ろくの筆を弄した「貝おほひ」の判詞はんごの一節である。するとこれをものものしい告白のやうに取り扱ふのは多少の早計ではないであらうか？ 第二によし又告白だつたにせよ、案外昔の衆道好きは今の衆道好きではなかつたかも知れない。いや、今も衆道好きだつたとすれば、何も特に「昔は」と断る必要もない筈である。しかも芭蕉は「貝おほひ」を出した寛文十一年の正月にもやつと二十九歳だつたのを思ふと、昔と云ふのも「春の目ざめ」以後数年の間を指してゐるであらう。かう云ふ年頃の Homo-Sexuality は格別珍らしいことではない。二十世紀に生れた我々さへ、少時せうじの性慾生活をふり返つて見れば、大抵一度は美少年に恍惚とした記憶を蓄へてゐる。況や門人の杜国とこくとの間に同性愛のあつたなどと云ふ説は畢竟ひつきやう小説と云ふ外はない。

十一 海彼岸の文学

「或禪僧、詩の事を尋ねられしに、翁曰、詩の事は隱士素堂と云ふもの此道に深きすぎものにて、人の名を知れるなり。かれ常に云ふ、詩は隱者の詩、風雅にてよろし。」

「正秀問、古今集に空に知られぬ雪ぞ降りける、人に知られぬ花や咲くらん、春に知られぬ花ぞ咲くなる、一集にこの三首を撰す。一集一作者にかやうの事例あるにや。翁曰、貫之の好める言葉と見えたり。かやうの事は今の人の嫌ふべきを、昔は嫌はずと見えたり。もろこしの詩にも左様の例あるにや。いづぞや丈艸の物語に杜子美に専ら其事あり。近き詩人に于鱗とやらの詩に多く有る事とて、其詩も、聞きつれど忘れたり。」

于鱗は嘉靖七子の一人李攀竜のことであらう。古文辞を唱へた李攀竜の芭蕉の話中に挙げられてゐるのは杜甫に対する芭蕉の尊敬に一道の光明を与へるものである。しかしそれはまづ問はないでも好い。差当り此処に考へたいのは海彼岸の文学に対する芭蕉その人の態度である。是等の逸話に窺はれる芭蕉には少しも學者らしい面影は見えない。今仮に是等の逸話を当代の新聞記事に改めるとすれば、質問を受けた芭蕉の態度はこの位淡泊を極めてゐるのである。――

「某新聞記者の西洋の詩のことを尋ねた時、芭蕉はその記者にかう答へた。――西洋の詩

に詳しいのは京都の上田敏である。彼の常に云ふ所によれば、象徴派の詩人の作品は甚だ幽幻を極めてゐる。」

「……芭蕉はかう答へた。……さう云ふことは西洋の詩にもあるのかも知れない。この間森鷗外と話したら、ゲエテにはそれも多いさうである。又近頃の詩人の何とかイツヒの作品にも多い。実はその詩も聞かせて貰つたのだが、生憎すっかり忘れてしまつた。」

これだけでも返答の出来るのは当時の俳人には稀だつたかも知れない。が、兎に角海彼岸の文学に疎かつた事だけは確である。のみならず芭蕉は言詮を絶した芸術上の醍醐味をも嘗めずに、徒らに万巻の書を読んでゐる文人墨客の徒を嫌つてゐたらしい。少くとも学者らしい顔をする者には忽ち癩癩を起したと見え、常に諷刺的天才を示した独特の皮肉を浴びせかけてゐる。

「山里は万歳遅し梅の花。翁去来へ此句を贈られし返辞に、この句二義に解すべく候。山里は風寒く梅の盛に万歳来らん。どちらも遅しとや承らん。又山里の梅さへ過ぐるに万歳殿の来ぬ事よと京なつかしき詠や侍らん。翁此返辞に其事とはなくて、去年の水無月五条あたりを通り候に、あやしの軒に看板を懸けて、はくらの妙薬ありと記す。伴ふどちら可笑しがりて、くわくらん（霍乱）の薬なるべしと嘲笑ひ候まま、それがし答へ候はは

くらん（博覽）病が買ひ候はんと申しき。」

これは一門皆学者だつた博覽多識の去来には徳山の棒よりも手痛かつたであらう。

（去来は儒医二道に通じた上、「乾坤弁説」の翻訳さへ出した向井靈蘭を父に持ち、

名医元端や大儒元成を兄弟に持つてゐた人である。）なほ又次手に一言すれば、芭蕉

は一面理智の鋭い、悪辣を極めた諷刺家である。「はくらん病が買ひ候はん」も手厳し

いには違ひない。が、「東武の会に盆を釈教とせず、嵐雪是を難ず。翁曰、盆を釈

教とせば正月は神祇なるかとなり。」——かう云ふ逸話も残つてゐる。兎に角芭蕉の口の

悪いのには屢門人たちも悩まされたらしい。唯幸ひにこの諷刺家は今を距ること二百年ば

かり前に腸加答児か何かの為に往生した。さもなければ僕の「芭蕉雜記」なども定めし得

意の毒舌の先にさんざん翻弄されたことであらう。

芭蕉の海彼岸の文学に余り通じてゐなかつたことは上に述べた通りである。では海彼岸

の文学に全然冷淡だつたかと云ふと、これは中々冷淡所ではない。寧ろ頗る熱心に海彼岸

の文学の表現法などを自家の藥籠中に収めてゐる。たとへば支考の伝へてゐる下の逸話

に徴するが好い。

「ある時翁の物がたりに、此ほど白氏文集を見て、老鸞と云、病蚕といへる言葉の

おもしろければ、

黄鳥うぐひすや竹の子藪おひに老なくを啼

さみだれや飼蚕かひわづら煩わづらふ桑の畑

斯く二句を作り侍りしが、鶯は筍たけのこやぶ藪といひて老らうにや若わの余情もいみじく籠こもり侍らん。

蚕は熟語をしらぬ人は心のはこびをえこそ聞くまじけれ。是は筵むしろの一字を入れて家に飼ひたるさまあらんとなり。」

白樂天の長慶集ちやうけいしふは「嵯峨さが日記」にも掲げられた芭蕉の愛読書の一つである。かう云

ふ詩集などの表現法を換骨くわんこつ奪胎だつたいすることは必しも稀ではなかつたらしい。たとへば芭

蕉の俳諧はその動詞の用法に独特の技巧を弄してゐる。

一声ひとこゑの江えに横たふや時鳥ほととぎす

立石寺りつしやくじ（前書略）

閑しづかさや岩にしみ入る蟬の声

鳳来寺に参籠して

木枯こがらしに岩吹とがる杉間すぎまかな

是等の動詞の用法は海彼岸の文学の字眼じがんから学んだのではないであらうか？ 字眼とは

一字の工こうの爲に一句を穎異えいいならしめるものである。例へば下に引用する岑参しんしんの一聯ちように徴するがよい。

孤燈燃客夢 寒杵搗鄉愁

けれども学んだと断言するのは勿論頗る危険である。芭蕉はおのづから海彼岸の詩人と同じ表現法を捉へたかも知れない。しかし下に挙げる一句もやはり暗合に外ならないであらうか？

鐘消えて花の香は撞く夕べかな

僕の信ずる所によれば、これは明らかに朱飲山しゆいんさんの所謂いはゆる倒装法を俳諧に用ひたものである。

紅稻啄残鸚鵡粒 碧梧棲老鳳凰枝

上に挙げたのは倒装法を用ひた、名高い杜甫の一聯である。この一聯を尋常に云ひ下せば、「鸚鵡啄残紅稻粒 鳳凰棲老碧梧枝」と名詞の位置を顛倒てんたうしなければならぬ。芭蕉の句も尋常に云ひ下せば、「鐘搗いて花の香消ゆる夕べかな」と動詞の位置の顛倒する筈である。すると一は名詞であり、一は又動詞であるにもせよ、これを俳諧に試みた倒装法と考へるのは必しも独断とは称し難いであらう。

蕪村の海彼岸の文学に学ぶ所の多かつたことは前人も屢しばしば云ひ及んでゐる。が、芭蕉のはどう云ふものか、余り考へる人もゐなかつたらしい。(もし一人でもゐたとすれば、この「鐘消えて」の句のことなどはとうの昔に気づいてゐた筈である。)しかし延えん宝ぼう天和てんなの間の芭蕉は誰でも知つてゐるやうに、「憶ラウトヲオモフ老ヒゲカゼ杜フイ、髭ボシウタン風フイヲ吹テ暮秋歎ズルハ誰タガ子コゾ」
「夜着は重し呉こ天てんに雪を見るあらん」以下、多数に海彼岸の文学を翻案した作品を残してゐる。いや、そればかりではない。芭蕉は「虚みなしぐり栗」(天和三年上梓)の跋ばつの後に「芭蕉洞桃青」と署名してゐる。「芭蕉庵桃青」は必しも海彼岸の文学を聯想せしめる雅号ではない。しかし「芭蕉洞桃青」は「凝ギヨウエン烟キミドリヲオビヒニエイジテケンクレナキヲヨソホフ肌帯緑映日暇粧粧紅」の詩中の趣おもむきを具へてゐる。(これは勝峯晉風氏も「芭蕉俳句定本」の年譜の中に「洞の一字を見落してならぬ」と云つてゐる。)すると芭蕉は——少くとも延宝天和の間の芭蕉は、海彼岸の文学に少なからず心酔してゐたと云はなければならぬ。或は多少の危険さへ冒せば、談林風の鬼窟きくつり裡ださいに墮在ださいしてゐた芭蕉の天才を開かいげん眼眼したものは、海彼岸の文学であるとも云はれるかも知れない。かう云ふ芭蕉の俳諧の中に、海彼岸の文学の痕跡のあるのは、勿論不思議がるには当らない筈である。偶たまたま、「芭蕉俳句定本」を読んでゐるうちに、海彼岸の文学の影響を考へたから、「芭蕉雜記」の後に加へることにした。

附記。芭蕉は夙に伊藤坦庵、田中桐江などの学者に漢学を学んだと伝えられてゐる。しかし芭蕉の蒙つた海彼岸の文学の影響は寧ろ好んで詩を作つた山口素堂に発するのかも知れない。

十二 詩人

蕉風の付け合あひに関する議論は樋口功氏の「芭蕉研究」に頗る明快に述べられてゐる。尤も僕は樋口氏のやうに、発句は蕉門の竜象りゅうざうを始め蕪村も甚だ芭蕉には劣つてゐなかつたとは信ぜられない。が、芭蕉の付け合の上に古今独歩の妙のあることはまことに樋口氏の議論の通りである。のみならず元禄の文芸復興の蕉風の付け合に反映してゐたと云ふのは如何にも同感と云はなければならぬ。

芭蕉は少しも時代の外に孤立してゐた詩人ではない。いや、寧ろ時代の中に全精神を投じた詩人である。たまたまその間口の広さの芭蕉の発句に現れないのはこれも樋口氏の指摘したやうに発句は唯「わたくし詩歌」を本道とした為と云はなければならぬ。蕪村はこの金鎖きんさを破り、発句を自他無差別の大千世界へ解放した。「お手打てうちの夫婦なりしを衣こ

ろもがへ
更「「負けまじき相撲を寝物語かな」等はこの解放の生んだ作品である。芭蕉は許六の「名将の橋の反見る扇かな」にさへ、「此句は名将の作にして、句主の手柄は少しも無し」と云ふ評語を下した。もし「お手打の夫婦」以下蕪村の作品を見たとすれば、後代の豎子の悪作劇に定めし苦い顔をしたことであらう。勿論蕪村の試みた発句解放の善悪はおのづから問題を異にしなければならぬ。しかし芭蕉の付け合を見ずに、蕪村の小説的構想などを前人未発のやうに賞揚するのは甚だしい片手落ちの批判である。

念の為にもう一度繰り返せば、芭蕉は少しも時代の外に孤立してゐた詩人ではない。最も切実に時代を捉へ、最も大胆に時代を描いた万葉集以後の詩人である。この事実を知る為には芭蕉の付け合を一瞥すれば好い。芭蕉は茶漬を愛したなどと云ふのも嘘ではないかと思はれるほど、近松を生み、西鶴を生み、更に又師宣を生んだ元禄の人情を曲^{きよくじ}尽してゐる。殊に恋愛を歌つたものを見れば、其角さへ木強漢^{ぼくきやうかん}に見えぬことはない。況や後代の才人などは空也の瘦せか、乾鮭^{からざけ}か、或は腎氣^{じんき}を失つた若隱居かと疑はれる位である。

狩衣^{かりぎぬ}を砧^{きぬたぬし}の主^{ぬし}にうちくれて

路通^{ろつう}

わが稚名^{をさな}を君はおぼゆや

芭蕉

宮に召されしうき名はづかし

曾良^{そら}

手枕^{たまくら}に細きかひなをさし入^{いれ}て

芭蕉

殿守^{とのもり}がねぶたがりつる朝ぼらけ

千里^{せんり}

兀^はげたる眉を隠すきぬぎぬ

芭蕉

足駄^{あしだ}はかせぬ雨のあけぼの

越人^{をっじん}

きぬぎぬやあまりか細くあでやかに

芭蕉

上置^{うは置き}の干葉^{ほしな}きざむもうはの空

野坡^{やは}

馬に出ぬ日は内で恋する

芭蕉

やさしき色に咲るなでしこ

嵐蘭^{らんらん}

よつ折の蒲団に君が丸くねて

芭蕉

是等の作品を作つた芭蕉は近代の芭蕉崇拜者の芭蕉とは聊か異つた芭蕉である。たとへば「きぬぎぬやあまりか細くあでやかに」は枯淡なる世捨人の作品ではない。菱川の浮世絵に髻髻たる女や若衆の美しさにも鋭い感受性を震はせてゐた、多情なる元禄びとの作品である。「元禄びとの」、——僕は敢て「元禄びとの」と言つた。是等の作品の抒情詩的甘露味はかの化政度の通人などの夢寐にも到り得る境地ではない。彼等は年代を数へれば、「わが稚名を君はおぼゆや」と歌つた芭蕉と、僅か百年を隔つるのに過ぎぬ。が、実は千年の昔に「常陸少女を忘れたまふな」と歌つた万葉集中の女人よりも遙かに縁の遠い俗人だつたではないか？

十三 鬼趣

芭蕉もあらゆる天才のやうに時代の好尚を反映してゐることは上に挙げた通りである。その著しい例の一つは芭蕉の俳諧にある鬼趣であらう。「剪燈新話」を翻案した浅

井了意れういの「御伽婢子おとぎばこ」は寛文くわんぶん六年の上梓じやうしである。爾来じらいかう云ふ怪談小説は寛政頃まで流行してゐた。たとへば西鶴の「大下馬おほげば」などもこの流行の生んだ作品である。正しやうは保元う年に生れた芭蕉は寛文、延宝えんぼう、天和てんな、貞享ちやうきやうを経、元禄七年に長逝した。する芭蕉の一生は怪談小説の流行の中に終始したものと云はなければならぬ。この為に芭蕉の俳諧も——殊にまだ怪談小説に対する一代の興味の新鮮だった「虚栗みなしくり」以前の俳諧は時々鬼趣もてあそを弄もんだ、巧妙な作品を残してゐる。たとへば下の例に徴するが好い。

小夜嵐さよあらしとぼそ落ちては堂の月

信徳しんとく

古入道は失せにけり露

桃青たうせい

から尻沈む淵はありけり

信徳

小蒲団をうちに大蛇うろこがたの恨み鱗形

桃青

気違きちがひを月のさそへば忽たちまちに

桃青

尾を引ずりて森の下草

似春じしゆん

つま
夫は山伏あまの呼び声

信徳

うなぎ
一念の鱸となつて七まとひ

桃青

こつがたな かはらけつば
骨 刀 土器 鏝 のもろきなり

其角

瘦せたる馬の影に鞭うつ

桃青

山彦嫁をだいてうせけり

其角

あけすぐ
忍びふす人は地藏にて明過し

桃青

釜かぶる人は忍びて別るなり

其角

つち
槌を子に抱くまぼろしの君

桃青

その
今其とかげ 金色の王

けふすゐ
峡水

あまりようゆめ ちぎ
袖に入る 螭 竜 夢を契りけむ

桃青

是等の作品の或ものは滑稽であるのにも違ひない。が、「痩せたる馬の影」だの「槌
子に抱く」だのの感じは当時の怪談小説よりも寧ろもの凄い位である。芭蕉は蕉風を樹立
した後、殆ど鬼趣には縁を断つてしまつた。しかし無常の意を寓した作品はたとひ鬼趣で
はないにもせよ、常に云ふ可らざる鬼氣を帯びてゐる。

骸骨の画に

夕風や盆挑灯も糊ばなれ
ぼんちやうちん

本間主馬が宅に、骸骨どもの笛、
しゆめ
鼓をかまへて能する所を画きて、
のう

壁に掛けたり（下略）

稲妻やかほのところが薄の穂
すすき

（大正十二年—十三年）

青空文庫情報

底本：「現代日本文学大系 ㊦ 芥川龍之介集」筑摩書房

1968（昭和43）年8月25日初版第1刷発行

入力：j.utyama

校正：かとうかおり

1999年1月14日公開

2004年3月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

芭蕉雑記

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>